

# ズバリ直言

市田 知子

ドイツでは動物福祉が有機農業と密接に結びついている。動物福祉の点でとくに問題視されているのはオスの子牛、オスのヒヨコの処分である。

## 捨てられる家畜の話

子牛については女性ジャーナリストによる『捨てられる牛』(Die Wegwerfkuh 2015年)に詳しく書かれている。酪農経営でオス牛が生まれ、病弱な場合、餌を

やり続け育てることは経済的でないため、処分される。そもそもオス子牛には母乳をやらないため、免疫がつかず病弱になりやすいという。著者の取材先の子牛もまさにそうだった。写真家の友人に話したところ、その友人の12歳の娘がたいそうシヨ

ックを受け、子牛を救済することにした。とはいえ、友人の家では育てられないので、著者の近所の有機農家に預けた。子牛は「ジョニー・ローストビーフ」と名付けられ、以後、大事にされてすくすくと育っている

という話である。

オスのヒヨコの処分については、連邦政府の農業大臣が「2017年中にはなくす」と表明したものの、法律で禁止されているわけではない。6月にベルリン近郊で訪ねた有機農場ではオスの鶏も放し飼いで育てていたが、これも有機農場だからこそであろう。一消費者として感じるのだが、とにかく肉が安い。その裏側では、現在なお、おびただしい数の家畜が処分されているということなのか。

(明治大学農学部食料環境政策学科専任教授)